

十二年ニ二割方ノ増加ヲナシテ殆ンド二千九百萬噸餘ニ上レリ然ラバ之ト同時ニ此等ノ汽船ガ航行シタル里數及ビ使用シタル海員モ亦多少ノ増加ナカルベカラズ是等ノ數ハ正確ニ計算シタルモノナシト雖モ哩數ニ於テ少クモ五千萬海里ヲ増シ海員ニ於テ五萬人餘ニ及ブハ稍信ヲ置クニ足ルベシ此クノ如ク増進シタル海運業ニハ又相當ニ遭難者ノ多カラシムヲ思フベキナリ然ルニ實際ハ之レニ反シテ却テ減少シ行クヲ見ルナリ即チ千八百九十一年ヨリ前五ケ年ノ平均海上遭難者ハ一ケ年千六百六十四人ナルニ之レヲ十年前ノ昔時即チ千八百八十一年ヨリ前五ケ年ノ平均海上遭難者一ケ年千九百八十五人ニ對比セバ一割六分以上ノ減少ナリ蓋シ是レ造船學ノ進ミ運轉操縱宜シキニ適ヒ機關ノ製造及ビ船内ノ監督等皆其宜シキヲ得タルニ由ルモノニシテ明カニ海上ノ安全ヲ増加セル所以ナリ此、ル事實例證ノ歷トシテ多々之レ有ルニ拘ハラズ又陸上礦坑ニ於テ起ル所ノ危險死傷或ハ瀛車、電車ノ顛覆其他震災洪水山崩レ火災等ノ爲ニ非命ノ死ニ遭フモノ多キハ蓋シ海員ニ比スレバ幾數倍ナルニモ拘ハラズ樂易ナル海員ノ生活ヲ指シテ最モ危險ニ思フハ畢竟膽ノ小ナルニ歸由セズンハアラス獨リ自ラ海員生活ノ幸福ヲ享ケ得ザルハ恐トシテ之レヲ憫ムニ止マルベキモ

若シ此ノ生活ヲ疎外ニシ施イテ最モ尊重スベキ文明ノ此ノ恩惠者ヲ誤ラシムルニ至リテハ歎キテモ餘リアルコナラズ哉

第十三章 結 論

昨二十七年中ニ於ケル我國航業ノ狀況ヲ見ルニ其統計左ノ如シ

輸出入船舶ノ總噸數	二、六八九、八七一噸
内我國船舶ノ出入總噸數	二九六、九一九噸
内我國在籍ノ船舶	一、五一七艘
内我國在籍ノ船舶	八二八艘
輸出入貨物ノ總價額	二二〇、五六三、九七二圓
内我國船舶ニテ運送セル貨物ノ價額	一六、八三〇、四九七圓
輸出入貨物ノ實際噸數	三、三七二、五六六噸
内我國船舶ニテ運送セシ貨物ノ噸數	四四四、七九一噸

(以上統計ハ二十八年六月四日時事新報抜萃)

之レヲ見ルニ我國ノ船舶ヲ以テ運送セシ貨物ハ總價額ノ十二分ノ一ニ及バズ噸數ハ僅カニ一割三分以上ニ過ギズ今一噸ノ運賃ヲ平均二圓五十錢トスレバ我國船舶ノ得タル運賃ハ百二十万圓ニ上ラズ而シテ外國船ノ得ベキ運賃ハ七百八十二万圓以上ニ及ブ又假リニ保險料ヲ價額ノ千分ノ一ト定ムレバ我國船舶ノ保險料ハ千六百万圓ニ對シ一万六千圓ナルニ外國船舶ノ保險料ハ二十万圓以上ニ及ブ然ラバ則チ船數ニ於テコソ殆ンド五割ナレ實勢ヨリ之レヲ言フハ殆ンド言フ能ハザルナリ是レ抑モ國民ガ海事ヲ冷淡視シタルニ由來スルモノニシテ而シテ其冷淡視スルニ至リタルハ畢竟航海ノ所作ヲ知ラザルニ因ルナリ余ガ此ノ書ヲ公ニシタルモ是レガ爲メノミ若シ夫レ我國ノ海事ヲ發達セシムルノ必要ナケレバ何人トテ之レヲ呶々スルモノアラシヤ然レドモ其必要ノ大ニ在ルヲ以テ皆之レヲ言フテ已マザルナク唯之レヲ言フテ已マズ然レドモ遂ニ國民ヲ擧ゲテ海員海友タラシメ而シテ海國タルノ實ヲ擧グルノ兆ナキハ何ゾヤ要スルニ今日ノ論ヲ爲ス者多クハ遠州灘サヘ渡航シタルコナキモノ、ミ國民ノ理論ニノミ服シテ敢テ奮フモノ少キハ尤モナルコナラスヤ勿謂這般ノ人

ヲ稱シテ海事ノ思想ニ富メリト之レ一種ノ論客タルニ過ギザルナリ國民ノ思想ハ先ヅ航海ノ所作ヨリ説キテ以テ啓發セザルベカラザルナリ此ノ所作ヲ明ニシ而シテ又現時ノ海勢ヲ審ニセバ自ラ奮ハザラント欲スルモ勢能ハザルナリ此ニ於テ始メテ海國ノ實ヲ擧グルコトヲ得ベシ今之レヨリ本論各章ニ付キテ一々余ガ意見ヲ陳ジ庶幾ハ以テ航海所作ノ一般ヲ讀ミ終ハリタルモノヲ益スルアラシキ乎

第一章ニ於テ述ベタルガ如ク水界ノ變遷ハ生存競争ノ烈シクナルト共ニ避クベカラザルコトニシテ而モ其變遷ハ常ニ中心市場ヲ移轉セシメ延ヒテ各部落及ビ列國ノ消長興廢ヲ生ゼシコトハ既ニ東西ノ歴史之レヲ證明シテ盡セリト言フベシ然ラバ今日水界變遷ノ狀態ハ如何地中海旺盛ノ時代全ク過ギテ歐洲及ビ亞弗利加ノ西岸次第ニ振ヒ遂ニ今日大西洋ノ全盛期ニ達シテ紐育等ノ新市場ヲ生ジ其餘波兩米ヲ超ヘ太平洋ニ迫リテ地頸開鑿ノ大計トナリ桑港ノ繁盛トナリ東洋ニ通ズル三線路ノ大競争トナリ將ニ太平洋全盛期ニ進歩セントス願ミテ英ノ東方ヲ觀察セバ印度洋モ漸ク其高潮ヲ過ギ古倫慕ハ東漸シテ新嘉坡トナリ香港トナリ正ニ橫濱ニ迫マラズンバ已マザラントス是レ即チ太平洋全盛ノ期近キニ在ルノ兆ナラヤ

此ノ如東西ニ膨脹シ來リシ水界ガ太平洋ニ於テ衝突スルヲ見レバ太平洋コソハ最後ノ水界ニシテ從テ此ノ水界ノ航權ヲ支配スルモノガ最後ノ勝利者タラザルベカラズ彼ノ佛獨露ノ駭々トシテ太平洋ニ向フモ亦所以アル哉然ラバ則チ邦人ノ大計モ亦此ヲ標準トセザル可ラズ然ルニ何ゾ我國昨今ノ航業ハ忘ル、勿レ加奈多太平洋郵船「ユムプレス」號ニ勝ルノ客船ヲ具フニアラズンバ加奈多線路トハ競争スル能ハザルコトヲ嗚呼幾年ノ後ガ能ク斯ノ大計ニ達スルコトヲ得ンヤ

船体ノ變遷モ亦然リ今ヤ歐米ハ駭々トシテ改良ノ策ヲ取り新式ノモノ日ヲ逐フテ出デ來リ容易ニ當ルベカラザルノ勢アリ而シテ意ヲ用フル最モ精細ニシテ各航路ニ適當ノ構造ヲ施ス例ヘバ大西洋ニ行クモノ印度洋ニ行クモノ太平洋ニ行クモノ寒地ニ向フモノ暖地ニ來ルモノ等皆多少其利便ヲ異ニスベシ彼國人ハ皆此カル點ニモ新學識ヲ應用シテ以テ互ニ競争セルナリ然ルニ我國ニテハ更ニ是レ等ノ事ヲ頓着セザルノミカ彼ノ老朽船ヲ購入シテ因循姑息ノ航海ヲナス此クノ如クシテ如何ゾ太平洋上ニ彼等ト角逐スルコトヲ得ンヤ内國ニ於テハ別ニ笑フモノナカルベキモ亦其損タル不少也乞フ漫リニ船數ノ増加スルヲ見テノミ悦ブ

勿レ國民ノ海事ハ到底兒戲ニ過キササルナリ若シ今後海客海友大ニ増加シ箱館行ノ并船舶ノ如何ナルコトガ不愉快ナリシトカ長崎ニ下ルノ并彼ノ點ヲ改良シタランニハ利益多カラシト互ニ相研究スルノ時代トナラバ我國ノ海事モ始テ緒ニ付ケリト云フコトヲ得ベキナリ且ツ又歐米ノ機器ハ日ヲ逐フテ進歩シ行クヲ以テ此儘ニ時勢ノ到來ヲ俟ツベカラズ有識ノ士ハ大ニ此ニ見テ日新ノ機器ヲ應用シテ巧速ノ進歩ヲ計ラザルベカラズ今日ノ儘ニテ推移センニハ勢ノ定マル所既ニ太平洋ハ我有ニアラザルナリ海事ガ有爲ノ人ヲ俟ツ豈今日ヨリ急ナルコトアラシヤ

海岸ノ安否ハ海事ノ進歩ニ離ルベカラザルノ關係ヲ有スルコト既ニ第三章ニ言ヒタルガ如シ而シテ我國ノ海岸ハ如何ナル状態ノ我海岸線一万五千百八十五海里之レニ設備セル標識ハ明治廿八年初メニ於テ左ノ統計ノ如シ

官 設		私 設		合 計	
燈	臺	八四	三	八七	計 百十一基
夜標	竿	九	二	一一	

導燈	四	九	四
立標	一八	二四	一八
浮標	二四	二四	二四
計	一八	二四	一八
合計	四十二標		

之レニ依テ我環海ヲ周航シ見レバ海岸線百三十七海里毎ニ燈標一基ヲ見ルノ比例ナリ若シ燈標ノ光達距離平均二十海里トスレバ之レヲ百三十七海里ヨリ差引百十七海里間ハ全ク不安心ノ場所タリト云フベシ英佛其他二三ヶ國ノ明治廿五六年ニ於ケル燈標ト海岸線ノ比ヲ見ルニ實ニ左ノ如キモノアリ但シ同廿八年初メノ分ヲ正査スルヲ得ズト雖モ素ヨリ廿五年ノ燈數ヨリ遙ニ増設シタルコト明カナリ

- 英國燈標一基ニ對スル海岸線 十四哩
- 佛國燈標一基ニ對スル海岸線 八哩、五
- 獨國燈標一基ニ對スル海岸線 六十一哩

伊國燈標一基ニ對スル海岸線 十六哩

各國ノ旺盛ナル誠ニ由來アル哉文明交通ノ程度ハ明カニ彼我ヲ表シテ餘リアルニアズヤ素ヨリ即今我國ニ於テモ直チニ此クノ如キ燈標等ヲ設備セヨト云フノ狂者ハアラザラン然レモ英佛等諸國以上ノ如クニシテ始メテ是レ迄ノ水界ニ航權ヲ振ヒ併セテ目下ノ勢力ヲ得タルヲ思ヘバ後日太平洋岸ノ英佛タルベキ我國民ハ大ニ海事ニ奮發シテ其レ迄ノ程度ニ進ムコトヲ勉メサルベカラズ夫レ太西洋ノ航權ヲ集ムルニ於テ英國ガ此ノ如クニ海岸ノ設備ヲ爲シタルモノナレバ太平洋ノ航權ヲ集ムル我國ハ更ニ大ニ設備セザルベカラザルヤ明カナリ

次ギニ又海難救濟ノ事ヤ大ニ之レヲ世人ニ言ハザルベカラザルモノアリ夫レ海上ノ勤務ハ一般ニ危險多シ然レドモ亦此ノ海上ノ勤務程海國ノ生存ニ必要ナルモノアル乎人ノ安ヲ偷ミ苟モ免ルハ元ト性ノ然ラシムル所ナリ若シ誰レモ危險ナリトテ海上ニ勤務スルモノナカラシニハ列國交通ノ基ハ破レ文明進步ハ其レ迄トナリ退テ愈蠻風ニ服スベキハ是レ迄ノ東洋ノ各國史ガ照明スル所ナラズヤ當ニ是レニ止マラズ現今ノ趨勢ヨリ論ズレバ其國ハ到底

滅亡セザルベカラザルノ有様ナリ此ノ故ニ海國ノ業務ヨリ言ヘバ海上ノ勤務程貴キモノアル乎此ノ貴キモノニ向テ相當ノ待遇ヲ爲スベキハ苟モ海國ヲ以テ任ズル國民ノ義務ナラズヤ且ツ又敢テ自ラ其危險ニ投ジ而シテ其業ニ殉ズルガ如キモノハ大ニ扶掖セザルベカラザルモノナラズヤ世ノ海員ヲ尊重待遇スベキ寔ニ然ルベキモノナリ而シテ豈ニ唯海員ヲノミト言ハンヤ危險多キ海上ノ諸事ニ向ツテ救難ノ方法ヲ講ジ慈仁ヲ盡スベキハ仁俠ヲ知ル文明國民ノ一美舉タルナリ然ルニ我國民ハ能ク斯ノ辨別アル乎人ハ赤十字社ガ慈仁ノ深キヲ感ジ文明ノ金華ナリト云フテ之レヲ稱スルコト多シ實ニ然ルナリ其殉公ノ義士忠勇ノ兵士ニ向テ當ニ斯クセザルベカラザルナリ而シテ海難救濟會ハ遂ニ文明ノ華タル能ハザル乎何ゾ知ラン海士ノ海上ニ危險ヲ凌グヤ兵士ノ砲彈ヲ潜ルヨリ辛クシテ且ツ平時常ニ然ルヲヤ而シテ又海士ノ行爲文明ヲ脅迫スルニアラズシテ却テ誘導スルモノナルコトヲ之レヲ思ヘバ海難救濟會ノ設備ハ赤十字社ノ如ク完全ニ又赤十字社ノ如ク鄭重ニセラザルベカラズ嗚呼此ノ海事ヲ膨脹セザルベカラザル我國ニシテ海難救濟ノ舉ヲ唱導スル者少キハ豈浩歎ニ堪ユベケンヤ而モ斯民ヲ提ゲテ太平洋上ニ英佛ト角逐セントス誰カ仰天ノ感ナカラン近時海

員救濟會ノ聲漸ク大ナラントス願クハ温飽ノ紳士淑女更ニ一步ヲ進メテ海國ノ大計ヲ全フスルコトヲ企劃セラレヨ

造船所及ビ船渠ノ一又之レヲ忽緒ニ付スベカラズ今本年五月中頃ノ東京日日新聞掲載遞信省年報概要ヲ見ルニ廿六年末ニ於ケル我國造船所ハ横須賀小野濱及ビ吳ノ三官設ノ完全ナルモノヲ除キテ尙ホ私設ニ係ル完全ナルモノ三四ヶ所ト殘餘ノ微小ナルモノトヲ合セテ六十三ヶ所而シテ最近年度中ニ新造セシ船數ハ汽船四十二隻其總噸數四千六百四噸登簿噸數二千七百七十四噸帆船九隻總噸數七百一噸登簿噸數六百卅一噸ナリト云フ又一時工場ヲ設ケテ築造シタル船舶ハ汽船十三隻總噸數千百噸帆船十三隻總噸數三百五十九噸ニ及ブト云フ而シテ又廿六年末船渠ノ總數ハ官私ヲ合シテ十五ヶ所ナリト云フ而シテ此ノ主ナル船渠ノ容積ハ如何明治廿八年六月廿三日時事新報ニ依リテ之レヲ見レバ重ナル造船所ニ設ケタル船渠ノ容積ハ實ニ左ノ如シ

一號	長 三九二呎	巾 八二呎	深 二二呎
横須賀二號	長 五〇二呎	巾 九四呎	深 二八呎

三號

長 三〇八呎 巾 四五呎 深 一七呎

東京 長 二二〇呎 巾 四三呎 深 一四呎

長崎 長 四一一呎 巾 八九呎 深 二五呎

大阪 長 二五〇呎 巾 三三呎 深 一四呎

右ノ外尙三箇ノ傾斜架船修繕臺アリテ最大ナルモノハ二千噸餘ノ船体ヲ修繕スルニ適シ他
モ亦九百噸及六百噸ノ船體ヲ揚保スルヲ得ベシト云フ又三井物産會社モ其長崎立神ニ在ル
モノヲ擴張シテ長サ五百十七呎トナシ六十六間ノ大船ヲ修繕スルニ適セシメ更ニ飽ノ浦ニ
モ長サ三百七十呎餘ノ船渠ヲ新設スルノ計畫ナルヲ嘗テ世上ニ噂サスル所タリ

試ミテ見ヨ我國ニテ新造シタルモノハ汽船一隻ノ平均總噸數百〇九噸帆船一隻ノ平均總噸
數七十八噸ニ當ルナリ之レヲ千八百九十四年ニ於ケル英國ノ造船業ト對比シ見ルニ同國ニ
於テ同年間ニ新造セシモノ軍艦ヲ除キ汽船一隻ノ平均噸數實ニ一千七百五十七噸、六帆船
一隻ノ平均噸數一千二百五十三噸、五ナリ豈其懸隔モ甚シカラズヤ
其數ヲ以テスレバ汽船五百四十五隻噸數九十六万四千九百廿六噸帆船六十五隻數八万一

千五百八十二噸ニシテ實ニ我國ノ十數倍ニ當ル且ツ又我最モ完全ナル造船所橫須賀ニ於テ創
立以來明治二十五年迄ニ新造セシ軍艦ハ僅カニ十五艘ナリト云フ然ルニ千八百九十四年ノ
一年中ニ英國公私造船所ニテ新造セシ軍艦ハ卅一隻ニ及ブト云フ之レヲ思ヘバ太平洋上ノ
英國タル日本ハ誠ニ幼稚ナリト言ハザルベカラズ船渠ニシテモ亦然リ之レヲ聞ク去ル明治
廿四五年ノ頃英國ノ船渠ハ各種ヲ合シテ四百十九箇佛國ハ八十九箇獨國ハ六十箇ナリト云
フ嗚呼余ハ徒ラニ數ヲ以テ銜ハントスルニ非ラズ其必要アレバコソ其數モ多キ所以ナルヲ
思ヘバ今後彼等ト太平洋上ニ角逐セザルベカラザル我國海事ノ前途モ轉タ寂寥ノ感ナカラ
ンヤ夫レ製鐵所ノ軍事獨立ニ必要ナリト云フガ如ク造船所ハ豈ニ海國獨立ニ必要ナラズト
言ハンヤ余ハ我國ノ海事ガ是レ程迄モ低ク而シテ國民ガ余リニ海事ニ無頓着ナルヲ慨スル
ナリ

國民海事ニ冷淡ナル極寧ロ國民ガ海員ヲ相當ニ待遇セザルノ極我ノ有榮有利ナル水先人ヲ
スラ外人ニ爲サシメ居ルニアラズヤ之レヲ譬フレバ尙他人ヲシテ我園庭ノ案内ヲナサシム
ルガ如ク誰カ其奇觀ニ驚カザランヤ奇觀ハ好シ然レモ一朝事アル日ニ於テ彼輩能ク敵艦ヲ

案内スルガ如キニ至ラバ其レ如何殊ニ知ラズヤ我國沿岸ノ測量ニハ明治ノ初年米艦等ヲ雇役セシモノナルヲ沿岸ノ形勢ハ既ニ全ク彼等ノ眼中ニ落チタルモノナルゾ海國男子ノ決心豈容易ナランヤ貪眠ノ性モ亦甚シカラズヤ

海洋航海ノ技術今ヤ日ニ月ニ改良進歩シテ趨セテ尙ホ及ブ能ハズ然ルニ最モ後進タル我國ニシテ之レ等ヲ研究スルノ結社アル乎又個人アル乎船ニ在ルモノハ碌々トシテ敢テ進ンデ研究スルモノナク陸ニ居ルモノハ悠閑トシテ之レヲ答メズ若シ我東京商船學校ヲシテ充分ニ其力ヲ暢バサシムル能ズンバ我國ノ斯ノ學識モ到底暗流ノ萍タルヲ免レズ學者ハ何故ニ空律虛文ヲ論ズルノ腦髓ヲ以テ海事ノ研究ニ捧ゲザル乎之レヲ聞ク我國海員ニシテ經緯度ヲ測算スルニ必要ナル六分儀等ヲ所持セザルモノ甚ダ多シト抑モ該機等ノ能否ハ最モ船舶ノ安否ニ關ルモノナルニ彼等ニシテ措テ顧ミザルコト此クノ如キハ何ゾ其人ノ暗性然ラシムトハ言ヘ又國民這般ノ事ニ暗クシテ之レヲ答メザルニ因ラズンバアラズ若シ國民ニシテ相當ノ待遇ヲ與ヘ又之レヲ責ムルノ日ニ進マバ誰カ這般ノ不都合ヲ爲スモノアランヤ思ヘバ我國海事ノ獨立モ亦危哉思フニ磁力ノ如キ東西兩洋ノ諸國ニ於テ何人モ未ダ確實ナル定義

ヲ下シ得ルモノナク僅ニ電氣ニ關係セルヲ知ルノミニシテ其蘊奧ヲ審カニセズ從テ船舶ノ安全ニ最モ必要ナル羅針儀ニモ全ク正確ノ矯正ヲ爲ス能ハザルヲ以テ之レヲシテ正シキ方位ヲ指示セシムル能ハザルナリ海員ノ爲メニ不便タル幾許ゾ今ニ於テ此ノ真理ヲ探明シテ名聲ヲ擧グルノミナラズ斯業ニモ亦不少裨益ヲ與フルノ覺悟アルモノアル乎此等ノ學理迄ヲ技術家タル海員ニ委シテ顧ミザルハ大ナル誤ナリ

我國民ニシテ海事思想ニ富ムニ至レバ時間ヲ等閑ニ附スル能ハザルヤ明ナリ何ントナレバ航海業ノ時ヲ争フコト最モ切ナレバナリ例ヘバ航海中時一分ノ誤リハ經度ニ於テ十五海里ヲ違フベケレバナリ此ノ故ニ海國ノ民ハ時ヲ尊重スルコト甚ダシク日常ノ所作又此クノ如シ我國民ニハ素ヨリ遽ニ此等ノ事ヲ望ムベカラズト雖モ然レトモ我國標準時ノ必要ナハ碌々心得居ルモノ、少ナキハ實ニ言フニ堪ヘザルコトナラズヤ俗人ニシテ之レヲ知ラザルハ猶ホ怒スベシ然レモ普通學ヲ修メ異日大ニ爲スアラントスルノ學生輩ニシテ之レヲ知ラズト云フハ誠ニ海國トシテ立ツベキ我國ノ大耻辱ナラズヤ抑モ我國ノ標準正午ハ太陽ガ東經百三十五度明石ノ子午線ヲ通過スル時ナリ故ニ北海道ノ邊陲ヨリ大隅ノ南端ニ至ル迄全國到ル

處皆此ノ標準時ニ基クモノナリ斯ク標準時ヲ定ムルハ鐵道ニ依リテ安全ニ旅客貨物ヲ運搬スルニ必要ナルノミナラズ延ヒテ之レヲ船舶ニ接續シ遠ク海外ニ向テ交通ノ機關迅速ナラシメ商機ヲシテ違算ナカラシムルニハ必須ノモノタルコトヲ忘ルベカラザルナリ

帆船ノ論ハ敢テ再ビ之レヲ爲サズ然レモ唯世人ニ勸誘スベキモノアリ是最モ細事ト雖モ帆船ノ妙味ヲ解シ其樂ミト其理トヲ知ルニ於テ大ニ益アルベキヲ思フナリ即チ近時隅田川ニ於テ時々帆船ノ雛形ヲ浮ベ風波ニ任ジテ其行動ノ異ヲ樂メルモノアリ之レ最モ面白キ趣興ニシテ之レヲ前庭ノ大池ニ浮ベ後園ノ溪澗ニ流シテ以テ常ニ之レヲ見ルルハ深宮幽室ノ貴公子又ハ山間僻邊ノ稚兒ヲシテ航海ノ思想ヲ涵養セシメ自然ニ海國ノ氣風ヲ全フスルコトヲ得ンカ余ハ大ニ此等玩弄物ノ流行セルコトヲ希望シテ已マザルナリ而シテ此種ノ嗜好ガ發達スレバ遊船 Yacht 俱樂部ノ素形ヲ成シ海事ノ發達ニ少ナカラザル裨益ヲ與ヘンコトヲ信ズルモノナリ

抑モ遊船ノ紀元ハ富有家又ハ斯業先達ノ輩ガ娛樂ノ爲メ又研究ノ爲メニ起シタルニ始マリ英國ノ如キハ海岸到ル處遊船俱樂部ノ結社ナキハナク現今海事ノ進歩モ全ク其其恩惠ニ依ルモノナリト云フ我國ニテハ僅ニ橫濱港ニ於テ外國人ノ遊船俱樂部アルノミナリト我國幾多ノ縉紳高識ノ士ハ未ダ遊船ノ樂ムベキアルヲ知ラザル乎左リト婀娜妖姚タル花ニノミ戯レテ万金ヲ惜マズト言フハ余リ優長ナラズヤ權利義務扨通宵言ヒ續クルモ海國ノ本領ハ得ラレヌゾ見ヨ我國諸開港場ニ住スル彼レ外國人ハ暇アレバ港ニ端艇ノ帆走ヲ爲スモノ多シ翻テ邦人ハ此スヲ爲スモノナキニアラズヤ此頃端艇競争世人ノ注意ヲ引キ橫濱ニ琵琶湖ニ其勢ヒ稍盛ナルニ至レリ然レモ更ニ一進歩シテ諸港ニ品海ニ琵琶湖ニ端艇ノ帆走競争ヲ爲シ漸ク遊船俱樂部ノ結社ヲ全フスルニアラズンバ未ダ事ヲ言フニ足ラザルナリ

噸數論ノ如キ又大ニ言ハザルベカラズ昨今國民ハ勿論操觚者ヲ以テ自ラ任ズルノ輩ニシテ尙ホ噸數ノ何タルヲ知ラズ漫然吉野艦ハ何千噸西京丸ハ幾千噸ト言フハ實ニ海國臣民ノ面目ヲ得ルモノニアラズ現時ニ於テハ之レヲ知ラザルモ可ナラン然レドモ第一稅權ノ全部ヲ恢復スルノ日ニ至ラバ稅關ハ必ラズ外船ノ入港スル毎ニ直チニ行テ此ノ噸數ヲ調査シ之レニ對シテ港稅其他ノ諸稅ヲ徵收セザルベカラズ又ハ各自ニ船舶ヲ賣買スルカ又ハ海上保險ノ事又ハ商品積ミ入レ等ノ必要ヲ生ズルニ至ラバ自然ニ其知ラザリシノ結果ヲ見ルニ至ル

ベキナリ

嗚呼森々タル太平洋ノ水ハ其味鹹シト雖ドモ現ニ四千二百万ノ大民族ハ之レニ盥嗽セザル
 ベカラザルニアラズヤ漫々タル日本海ノ流ハ其冷甚シト雖ドモ以テ足ヲ洗フベキ所ナラズ
 ヤ見ヨ東瀛ヲ開テモ西窓ヲ瞰テモ送迎スルモノハ常ニ船艦ノ類ナラズヤ呀斯民ニシテ太平
 洋上ノ航權ヲ擧ゲテ洋夷ヲ飽カシメ開關以來未ダ嘗テ受ケシコナキ國辱ヲ蒙ルガ如キニ至
 ラバ大和民族ノ面目ハ何ニ依リテ全キコヲ得ル乎抑モ我國ガ現世界ニ後レシ事業其種類多
 カルベケン然レドモ已往ヲ追フテ尙ホ憤腕ヲ扼スルハ更ニ益ナキナリ今日ノ事ハ須ラク國
 民ヲシテ航海ノ何タルヲ知ラシメ進ンデ海上ニ來ルノ人ヲシテ多カラシムルニ在ルノミ之
 レヲ講ズルハ即チ急務中ノ急務ナリ若シ航海ノ所作ヲ悟リ然ル後海事ニ關スル議論出デ小
 説出デ以テ世人ノ耳目ヲ喚起セバ庶幾ハ其實ヲ擧グルニ裨セン乎筆ヲ擱テ結論トナス後日
 更ニ詳論スル所アランノミ

航海術終

5/5/37

明治二十九年十月廿三日印刷
 明治二十九年十月廿九日發行

定價金四拾錢

著者 松尾小三郎

京橋區靈岸島新船松町十三番地

發行者 今井元生

京橋區靈岸島新船松町十三番地

印刷者 野村宗十郎

京橋區築地三丁目十五番地

印刷所

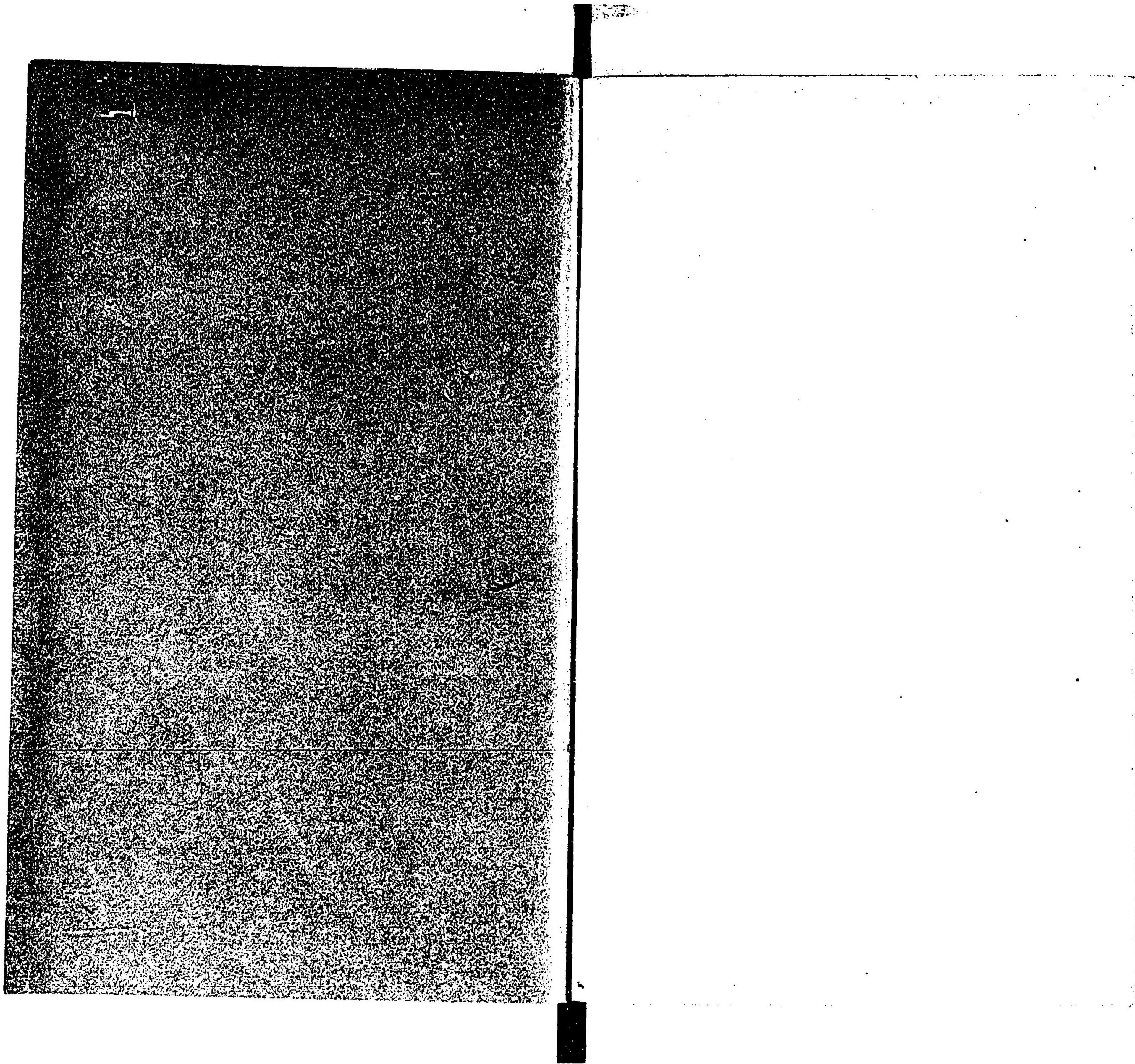
株式會社 東京築地活版製造所

京橋區築地二丁目十七番地

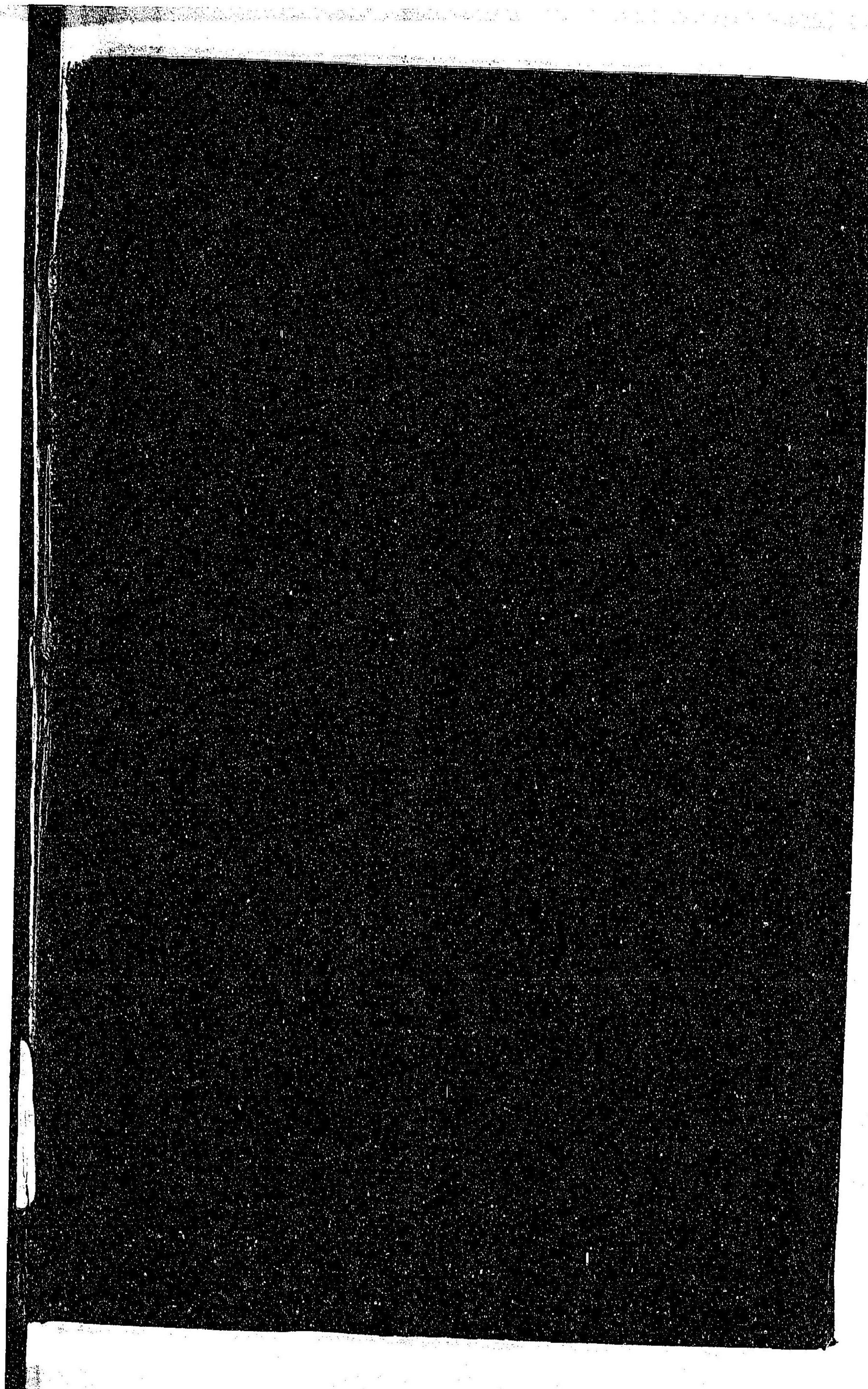


大賣捌所

芝區柴井町 松井忠兵衛
 日本橋區通三丁目 丸善株式會社書店



68
455





067072-000-2

68-455

航海術

松尾 小三郎 / 著

M29.10

CDG-0185



